

中高生と大学生によるフューチャーセッションの可能性 —鹿角市の地域活性化に向けて（前編）—

小暮 真人（武蔵野大学 経営学部 教授）

要約

本稿は、2021 年、2022 年に実施した鹿角市との地域活性化に関する共同研究についてまとめたものである。武蔵野大学と秋田県鹿角市は、2020 年 11 月、持続可能なまちづくりの実現を目的に包括連携協定を締結した。背景に鹿角市は尾去沢鉱山の閉山により人口が半減し、地域活性化が大きなテーマとなっていることがある。具体的には、鹿角市では人口減少による中心市街地問題が顕在化している。また、より深刻なのは中高生の定住意向が低いことで、このままでは将来的にUターンを期待することができない。さらに、鹿角市に大学がないので高校生は卒業後、他県に転出せざるを得ないという現実もある。今回の研究は、このトリレンマについ鹿角市の中高生と武蔵野大学の学生がフューチャーセッションを行い、そこから得られた新たな価値、アイデアを政策に反映できないかという試みである。

（はじめに）

秋田県鹿角市は、中心市街地問題を抱えている。尾去沢鉱山が 1978 年に閉山し、以降、定住人口の減少が続いていることが大きな要因である。定住人口が減少するとほとんどの地域では賑わいが失われる。もちろん、箱根町のように定住人口が減少しても、それを上回る昼間人口と観光客により賑わっている地域もあるが、それは極めて異例である。そこで多くの地域は人口を増やそうとする。鹿角市も様々な移住促進事業を実施し、これまでに 400 人を超える移住者を迎えてきた。

移住には、大きく I ターン、J ターン、U ターンがあるが、ふるさとを未来に繋ぐという観点では、鹿角生れ・鹿角育ちの元市民の U ターンを安定的に確保することが重要である。しかし、鹿角市の調査で中高生の多くが「将来的にも鹿角市に戻らない」という意向をもっていることが明らかになった。このままでは、

将来的にUターンを期待することができない。

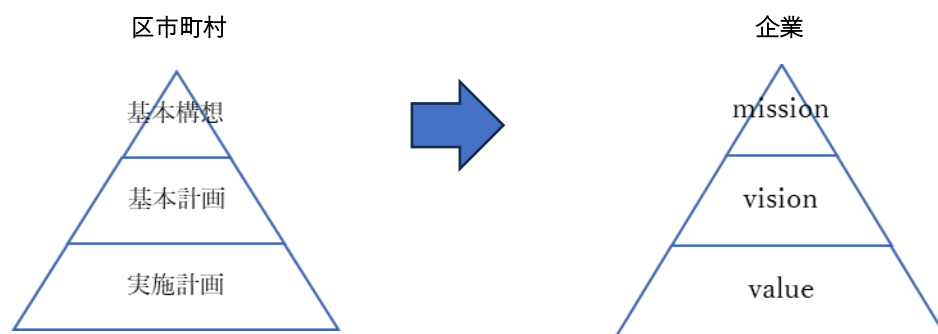
今回の共同研究は、中心市街地の衰退と中高生の定住意向が低いこととことに着目し、就職や進学で故郷を離れても、いつか故郷に戻ることができるための課題を考えることを目的に実施した。具体的には鹿角市の未来を担う中高生と鹿角市を知らない大学生が鹿角市でフィールドワークを行い、対話することで鹿角の未来を描き、今から、どんなことに取り組んだら良いかを一緒に考えるワークショップである。

地域で育った子供たちは、よほどのことがなければ、育った地域のことを嫌いになることはない。若者が地域を離れるのは、チャレンジ精神の表れであるとともに、一方では若者を留める魅力がないからでもある。魅力があれば、鹿角を拠点に選ぶ若者が増えるかもしれないし、一度、鹿角を離れても、いつか戻りたいと思う若者が増えるかもしれない。そんな願いを込めた研究である。

1. 地域の未来を考える

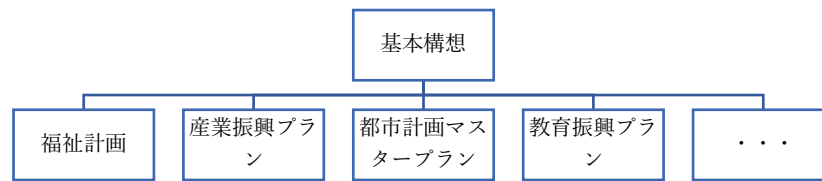
1.1 自治体の将来像

組織がイノベーションを必要としているのは、民間も行政も同じであるが、イノベーションのカギとなるのは、組織の将来像をどのように描くのかということである。そして、将来像も重要であるが、将来像を描くプロセスも重要になっている。



例えば、区市町村には地域の将来像を描いた基本構想、将来像を実現するための基本計画、具体的な取り組みを体系化した実施計画がある。組織のミッション、ビジョン、バリューに相当する。さらに、区市町村は、基本構想を上位概念とし、その下に福祉、高齢者、児童、教育、防災、安全、産業、医療など部門ごとに構想・計画がある。これは企業経営でいうと全社戦略と個別戦略（事業戦略）にな

る。

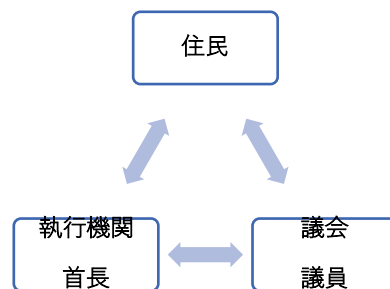


1.2 将来像の決め方

起業は別として、企業がビジョンを描くとき、ホールシステム・アプローチが採用される例が増えている。一定の規模の企業は、従来であれば、企画部門等が中心となって案を作り、取締役会で決定してきたが、全社員によるワークショップを何回か実施し、企業の将来像を描いくというスタイルである。

同様に区市町村にも基本構想という当該区市町村の将来像がある。

地方公共団体は執行機関と議会から構成され、地域の将来像である基本構想は議会における議決を必要とする。区市町村は新しい事業に取り組むスピードが遅いという指摘がある。その理由には、企業の場合は代表取締役が事案を意思決定し、直ぐに実施できるのに対し、地方公共団体は執行機関である長が意思決定した事案をさらに、議会に提案し、団体意志として決定されないと実施できないからである。つまり、自治（住民自治と団体自治）を担保するために二重の手続きを要するので時間がかかる。



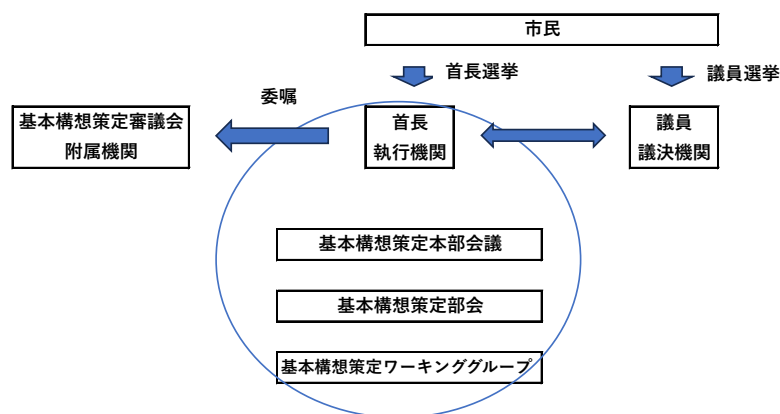
基本構想の議案を議会に提案する権限は議員と首長の両方にあるが、首長が提案するケースがほとんどである。なぜならば、議会は住民サービス等を提供しているのではなく、執行機関である長が適正に住民サービス等を行っているかをチェックすることが役割だからである。議員は福祉委員会、土木委員会など、いずれかの分野別委員会に属してその役割を果たしている。一人の議員が取り組める部門は限定的であるが、執行機関である長は全ての部門を統括し、執行責

任をもっている。つまり、地方公共団体という組織全体に関係する構想をまとめるには首長しか、実務上の能力を持ち合わせないという実態がある。

そして、首長が基本構想案をつくるといっても、あらゆる行政分野に精通しているわけではない。そのため、まず、庁内的には各部門のトップからなる基本構想策定推進本部を設置し、具体的な検討は課長、係長級職員からなる分科会で構想案を検討する。さらに、内部だけでつくと身内に甘くなるという批判をかわすために、外部の学識経験者や市民の代表による基本構想審議会も同時に設置し、庁内でまとめたものを適宜、委員会に諮り、意見を聞きながら、構想案をまとめていく。

首長がまとめた基本構想案は、最終的に、議会に諮り、可決されて初めて基本構想になる。最終案ができてから議会に提案しても法律上は問題ないが、円滑に審議、決定してもらうためには、議会特別委員会を設置し、適宜、基本構想の検討状況を説明し、議会の意見を聞くということも行っている。

これが一般的な区市町村の将来像づくりである。



1.3 フューチャーセッションの可能性

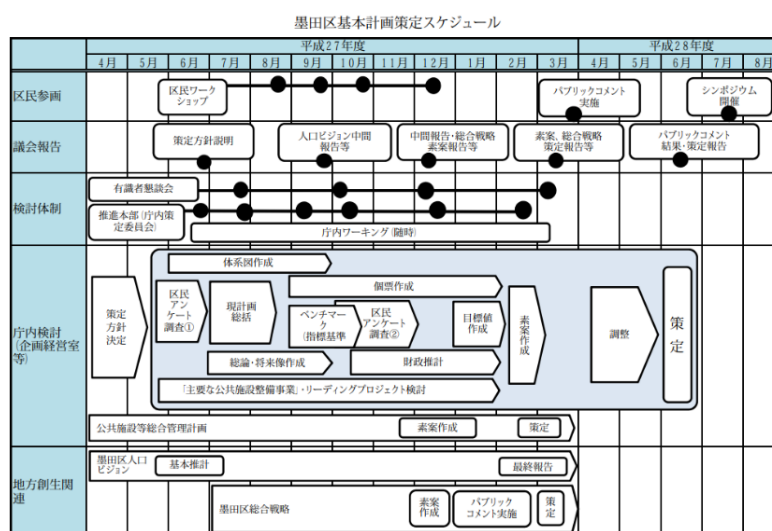
起業の場合は、創業社長、もしくは初期メンバーがミッション、ビジョン、バリューをつくり、開業後、雇用された社員ができあがったミッション等に合わせる。極論すると起業する社長のアイデア＝会社の事業構想なので、トップダウンであることは当然ともいえる。しかし、その企業の経営が軌道に乗ってくると、個々の社員の目標と社長の目標が一致していなければ、企業の持続可能性が低下する。そこで社員のエンゲージメントを向上させるために、ホールシステム・

アプローチが採用される。できるだけ幅広く社員が参加してワークショップを行いミッション、ビジョンを考えるケースが増えてくる。しかし、顧客まで含めてミッション、ビジョンづくりをすることは稀である。

区市町村の基本構想も、職員組織による検討、学識経験者、市民代表による委員会による検討というプロセスを経て議会で決定されてきた。市民代表が参加するといっても、長が委嘱する諮問機関に所属することとなるので、内部組織であることに変わりがなく、いわゆるクローズドイノベーションの域をでない。

ところが、区市町村でもこの内部プロセスに加え、多くの市民に参加を求めたオープンイノベーションが始まっている。例えば、墨田区では、下表のように基本計画の策定にあたり、区民のワークショップを取り入れ、そこで得られた新しい価値を計画に盛り込んでいる。

平成27年8月7日第1回墨田区基本計画等有識者懇談会資料

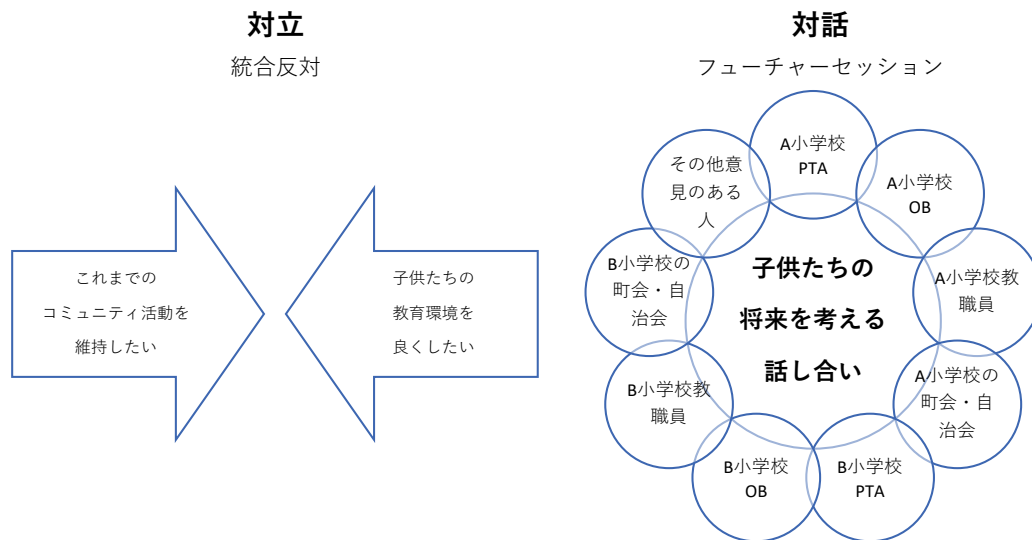


フューチャーセッションとは「未来に向けた問いかけがあり、それに呼応して集まった多様な参加者が、対話を通じて相互理解と信頼関係を築き、新たな関係性と新たなアイデアを同時に生み出し、協調してアクションを起こしていく場」である。したがって、未来を考えるワークショップ、未来会議などと呼ぶこともある。

区市町村の基本構想は、まさしく「(地域の) 未来に向けた問いかけ」であり、学識経験者、業界や地域代表による検討だけでなく、一般の市民ができるだけたくさん参加することが望ましい。多くのステークホルダーの参加を求め、地域の未来を考えるワークショップを行うことで、より意味のある将来像にたどり着

くことができる。「たどりつく」という言葉を使うのは、将来像には $1 + 1 = 2$ という単一解がなく、他解答問題であり、さらにプロセスにおいて試行錯誤を繰り返す必要があるからである。

以上は市町村全体の将来像づくりであるが、個別の分野でもフューチャーセッションは有効である。



例えば、これまでに実践した事例として学校の統廃合がある。少子化が進む中で、小中学校では児童・生徒数の減少が著しい。児童生徒数が減少すると配置される教員も減少し、さらに単学級になるとクラス替えができないなど教育環境上、好ましくないのが、近隣の学校が統合する必要がある。しかし、学校はコミュニティの拠点でもあることから、影響を受けるコミュニティから反対の声があがる。町会や自治会は学校の通学区域を単位に活動しており、地域が違えば、まつりや交通安全、防犯・防火活動でもやり方が異なり、子供会活動も異なる。コミュニティ活動が異なる地域が一つになるというのは、対立から始まるのが常である。より良い教育環境をとるのか、コミュニティをどう守るのか？このジレンマから脱出するために、統合に反対する人を含め、できるだけ多くのステークホルダーを集め、地域の子供たちの未来を考えるワークショップを行った。既存のシステムに拘る人たちがジレンマを乗り越えて、新しい未来を描くには時間を要するが、議論でなく対話を続けることで「子どもたちにとってより良い教育環境となっている」といという将来像にたどり着くことができた。

今回、鹿角市の中心市街地の活性化という未来に向けた問いかけに、鹿角市の

中高生と鹿角市に住んでいない大学生が共にフューチャーセッションを行った。このプロセスを通して、創造された新しいアイデアによって、中高生、大学生のふるさとへの定住意向が高まることを期待したい。

2 鹿角市とは

2.1 地勢

秋田県最北東部に位置する自治体、鹿角市。北東北 3 県のほぼ中央に位置し、北は青森県や東は岩手県に接し、大館市などとも接する。市域は東西 20.1 km、南北 52.3 km と南北に長く、総面積は 707.52 km² で全国に 1741 ある市町村の中で 99 番目に広い。可住地面積は 148.38 km²、全国 213 位、秋田県 11 位となっており、市域の約 8 割は林野などで人が住むことは困難な地域である。



縦に長い市域の中央部を南北に米代川が流れ、その米代川に沿って国道 282 号、JR 花輪線、東北自動車道が通っている。市内には鹿角八幡平、十和田の 2 つのインターチェンジがあり、盛岡市、青森市、八戸市など主要都市と 1 時間圏内で結ばれているだけでなく、首都圏とも直結している。鉄道交通は 1 日、上り、下りそれぞれ 6 本であるが、自動車交通の利便性は高い地域である。

2.2 自然と農業

鹿角市の特徴は、市域の 8 割が山野、河川などで、十和田湖、大湯川、八幡平、ドラゴンアイ、湯瀬溪谷など豊かな自然に恵まれていることである。鹿角市にある八幡平山間部の母森（つがもり）、三方向（さんぼうこう）m などは 1000m

を超えるが、多くの山は 1000m に満たない低山であり、古から人々は自然と共生してきた。自然からの恵みは、姫竹、山菜、キノコ、栗などがあり、熊、猪、鹿など野生動物も多く生息する。また、降雪は 12 月から 3 月末まで続くが、気温の年較差、日較差が大きく、降水量は年間約 1500 mm であることから農業に適した環境である。こうした自然環境を生かして、牛や豚などの畜産、りんごや桃、大根、ネギ、米などの農業が主要産業となっている。

鹿角市の耕種（農作物）農業の内訳と秋田県内・国内における農業産出額の割合

2016年農業生産所得統計より作成

品目名	鹿角市	秋田県内（24市町村）			国内（1719市町村）	
	総額	占有率（％）	順位（位）	総額（千万円）	順位（位）	総額（千万円）
耕種	459	3.3	13	13,802	392	600,218
米	216	2.3	16	9,439	208	165,898
雑穀	5	18.5	2	27	31	826
豆類	1	0.6	17	161	479	5,780
いも類	2	2.0	14	100	652	23,949
野菜	100	3.5	11	2,869	578	255,680
果物	85	11.8	3	720	201	83,354
工芸農作物	26	16.6	1	157	145	18,706

鹿角市の畜産農業に関連するの農業産出額の内訳

2016年農業生産所得統計より作成

品目名	鹿角市	秋田県内（24市町村）			国内（1719市町村）	
	総額	占有率（％）	順位（位）	総額（千万円）	順位（位）	総額（千万円）
畜産	481	13.6	3	3,539	185	319,101
肉用牛	47	7.6	4	619	363	73,403
乳用牛	32	8.8	5	364	440	91,323
豚	400	26.8	2	1,494	31	51,862
その他畜産物	2	11.1	3	18	120	5,329

2.3 鹿角市の歴史・文化・観光

鹿角市には縄文時代の集落や古墳がありことから長い歴史があり、特に金山が開発されてから、奈良時代には東大寺大仏の金メッキに使用され、平安時代末期には平泉の中尊寺に使われるなど経済的にも重要な地域であった。現在それらの歴史・文化が重要文化財や世界遺産となっている。世界遺産に登録されている大湯環状列石、ユネスコ無形文化遺産の大日堂舞楽、花輪ばやし、毛馬内盆踊りもある。 コロナ流行以前の観光客数の推移を見ると、平成 28 年は 5 月から 6 月の姫タケノコの時期に熊害が続いた影響で観光客が減少したが、ユネスコ効果もあって、増加傾向にある。特に、花輪ばやし、毛馬内盆踊り、花輪ねぶたなど祭りが連続する 8 月は年間の観光客数の四分の一をしめるなど、鹿角市では歴史・文化が貴重な観光資源になっていることがわかる。



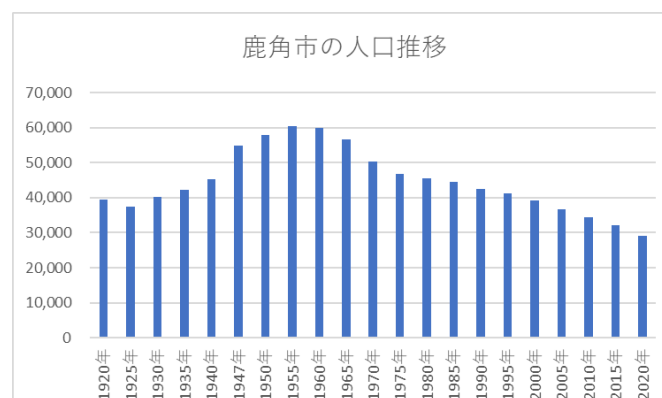
鹿角市の観光客数の推移（千人）					
	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年
年間総数	1747.1	1765.8	1689.0	1754.3	1780.1
8月観光客数	348.9	399.0	383.3	448.9	417.6
同上割合	20.0	22.6	22.7	25.6	23.5

鹿角市平成30年版統計書より作成

2.4 人口

このように様々な魅力をもつ鹿角市であるが、現在の人口は27,937人（令和5年7月31日）で、昭和30年代の6万人をピークに減少の一途をたどっている。大きな要因は、尾去沢鉱山の閉山であるが、秋田県では大館市、能代市など県内他都市でも人口減少が続いていることから、秋田県全体の経済的基盤が弱体化に加え、高齢化率37.2%（2019年）が全国一位ということも要因である。しかし、鹿角市では花輪ばやしの時期になると進学や就職で鹿角を離れた人たちが戻り、祭りに参加している。ふるさとに戻って祭りに参加するということは、鹿角で生まれ、育った人たちにとって、鹿角市の文化・歴史は次の世代に継承する価値があるということではないだろうか。

e-Stat 国勢調査より作成



2.5 鹿角市の工業

鹿角市には、もともと雪国ならではの質の高い労働力があり、さらに東北自動車道の開通後は物流の利便性も加わったことから、様々な製造業が立地している。十和田地区の鹿角工業団地には、板金、溶接の加工に加え、精密プレスも得意とする(株)サンテック、相川プレス工業のグループで金属加工のほか樹脂成型も手掛けるアイデックス(株)など、現在、4工場が立地している。しかし、鹿角市のものづくりの強みは、団地以外にも様々な工場が展開していることだ。例えば、毛馬内には装置組立、制御盤組立等を得意とするジョイタイム(株)、ここは社員の7割が女性という特色もある。また、昭和グループでコンピュータ関係の精密板金加工の十和田精密工業(株)、八幡平にはBEAMS、コムデギャルソンなどアパレルブランドのボトムを生産する(株)サッシュなどが立地している。これら製造業は出荷額や付加価値額といった経済面だけでなく、雇用という面でも重要である。製造業の事業所数は、平成28年107件で市全体の7.2%に対し、従業者数は1771人で市全体14%と倍のシェアとなっている。さらに、2020年工業統計調査から業種別の各種特化係数を算出すると、製品出荷額、付加価値額の特化係数が高くなっている事業所が多いこともわかる。つまり、農業や畜産などの第一次産業だけではなく、各種製造業も地域産業として機能しているのである。

	事業所数			従業者数			特化係数（県内）					特化係数（全国）				
	鹿角市	秋田県	全国	鹿角市	秋田県	全国	事業所数	従業者数	現金給与額	製造出荷額等	付加価値額	事業所数	従業者数	現金給与額	製造出荷額等	付加価値額
食料品	16	302	23,542	387	7,957	1,132,189	1.5	1.9	4.3	6.5	5.6	2.1	1.6	9.7	6.2	4.2
繊維	7	243	10,562	210	5,947	238,748	0.8	1.4	2.1	2.3	2.5	2.0	4.2	2.0	5.7	5.7
窯業・土石	5	87	8,998	43	1,575	236,690	1.6	1.1	1.8	1.4	2.1	1.7	0.9	3.1	1.6	1.6
電子部品・デバイス	5	94	3,772	201	12,739	409,489	1.5	0.6	0.8	0.5	0.6	4.0	2.4	6.0	3.1	3.6
電気機械	5	48	8,279	202	2,060	501,346	2.9	3.8	7.1	7.8	9.4	1.8	1.9	7.1	3.1	3.6
家具・装飾品	3	38	4,557	30	800	88,798	2.2	1.4	2.4	2.4	3.3	2.0	1.6	1.0	3.0	3.8
木材・木製品	2	115	4,600	14	2,395	87,281	0.5	0.2	非公表	非公表	非公表	1.3	0.8	非公表	非公表	非公表

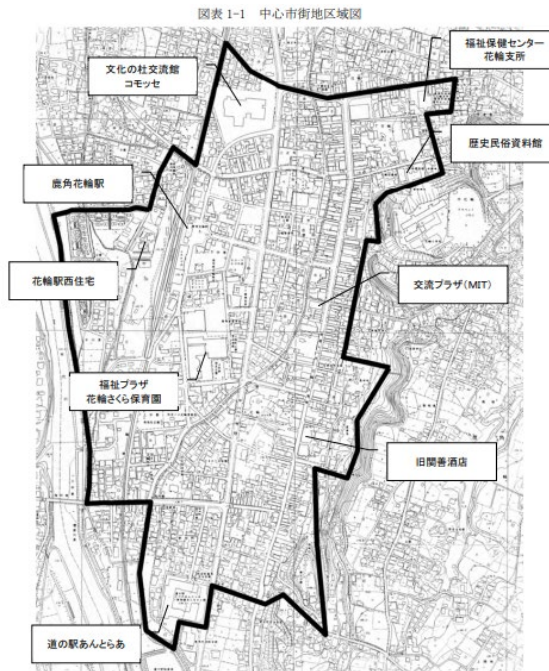
2020年工業統計表より作成

3 鹿角市中心市街地の現状と課題

3.1 中心市街地の概要

鹿角市の中心市街地は下図の0.27km²である。4つの商店街（大町、新町、谷地田、花通り）が形成されている商業地域を中心とし、福祉保健センターやコモッセなどの公共施設、歴史民俗資料館、交通拠点の鹿角花輪駅、道の駅あんたらあ、金融機関や病院等が集積している区域である。市民生活に必要な都市機能（生産機能、交易機能、消費機能）に加え、社会教育機能、文化観光機能を組み

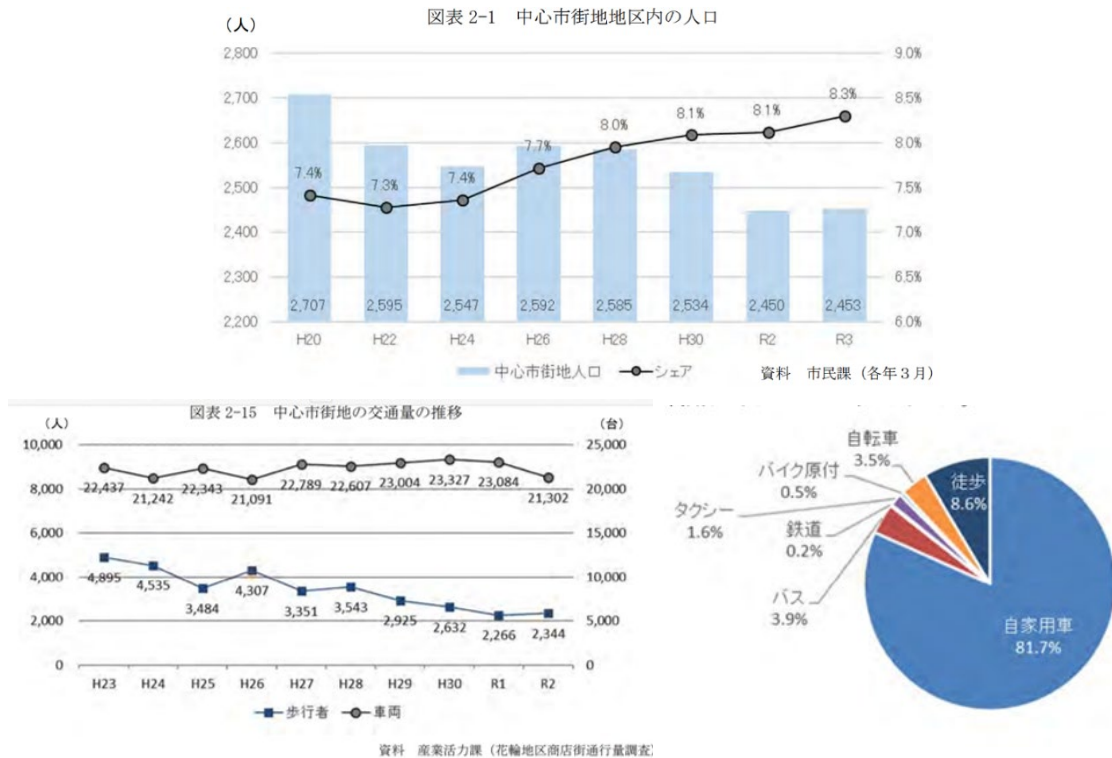
合わせたコンパクトシティである。



3.2 人の流れ

中心市街地の人口は減少しているのに市全体のシェアは年々上昇している。それだけ中心市街地以外の人口減少が大きいことになるが、中心市街地に住む人口は着実に減少していることには変わりはない。実際に、鹿角市を訪ねてみて商店街に人通りがないというのが第一印象だった。しかし、十和田八幡平駅伝競走全国大会、花輪ねぷた、花輪ばやしなどが開催されると、多くの人で賑わっているという現実もある。

いずれにしても、中心市街地では人流が減少傾向にあり、歩行者交通量は平成23年の1日約5,000人から令和2年には約2,300人、半分に以下に減少している。その一方で車両交通量は10年間、1日21,000台～23,000台で安定している。中心市街地に来る手段を調べた調査では、自家用車は8割を超え、一方の徒歩は8.6%に過ぎない。回答者の居住地構成を見ると、44.4%が中心市街地のある花輪地区なので、徒歩で中心市街地に来る人の割合はもう少し多くても良いはずである。鹿角市では近所にも車で行くというライフスタイルが定着していることが想定できる。



3.3 中心市街地の商業

人口減少と比例し、鹿角市全体の小売業の事業所数は、平成 28 年は平成 14 年と比較し約 4 割減少し 301 事業所、従業者数も 26.6%減少し 1,837 人となっている。一方で平成 14 年から平成 28 年までの小売業年間販売額を見ると、366 億円前後で横ばいであることから、一事業所当たりの販売額は増えているので鹿角市全体としては商業は何とか頑張っている。

しかし、中心市街地についてみると、歩行者は平成 23 年の 4,895 人/日から令和 2 年には 2,344 人/日に半減し、人流に反比例して商店街の空き店舗数は 10 年間で倍に増加した。さらに中心市街地の小売業年間販売額の市全体に占めるシェアが平成 14 年の 28.4%から平成 26 年には 20.2%と低下していることから、現在、中心市街地で営業を続ける小売業は市の平均と比べて売上が落ちており、厳しい状況が浮き彫りとなっている。

図表 2-11 空き店舗数の推移 (件)

	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3
大町	9	10	11	12	17	16	14	15	17	17	18	18
新町	2	3	3	4	5	5	5	6	5	5	8	7
谷地田	8	8	7	6	2	2	4	3	3	3	3	4
花通り	4	5	5	7	9	10	9	10	11	9	11	21
合計	23	26	26	29	33	33	32	34	36	34	40	50

資料 産業活力課（商店街実態調査、各年9月末）



4 Uターンの危機

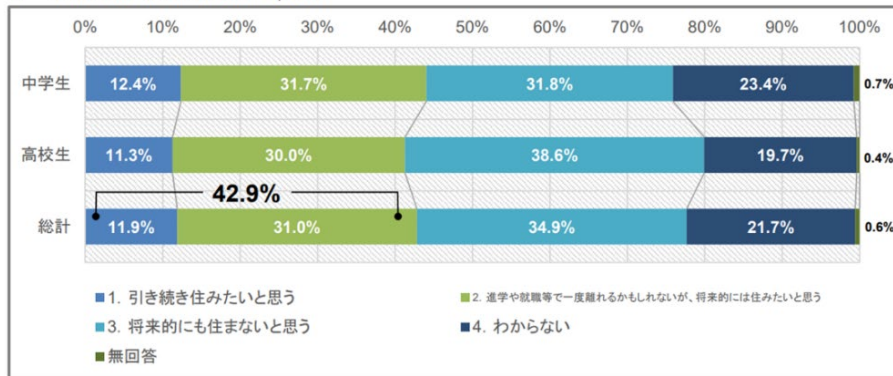
4.1 中高生の定住意向

令和元年度、鹿角市が行った中高生を対象にした定住意向等の調査によると、「2. 進学や就職等で一度離れるかもしれないが、将来的には住みたいと思う」を選択した中高生の割合は 31.0%。また、「1. 引き続き住みたいと思う」割合が 11.9%に対して、「3. 将来的に住まないと思う」割合は 34.9%となっている。中高生の段階から「将来的に住まないと思う」という意向が多いことから、今後とも高校卒業後の若者が減少するということが想定される。

このリスクを回避するには「3. 将来的に住まないと思う」中高生が「2. 進学や就職等で一度離れるかもしれないが、将来的には住みたいと思う」にシフトするかどうかポイントとなる。

第7次鹿角市総合計画まちづくり中高生アンケート

1 中高生別（回答者数 n=1,205）



令和4年の人口をベースにしたシミュレーション

		1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	7年目	8年目	9年目	10年目
	人口（R4.3.31）	28,933									
	人口（試算数値）	29,000	28,868	28,736	28,604	28,472	28,340	28,208	28,076	27,944	27,812
半年度	卒業生	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200
	引き続き住む人	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24
	将来住まない人	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70
	将来住みたい人	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62
	当該年度転出数	132	132	132	132	132	132	132	132	132	132
シナリオ1	Uターン数	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
	シナリオ人口	29,000	28,878	28,746	28,614	28,482	28,350	28,218	28,086	27,954	27,822
シナリオ2	Uターン数	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60
	シナリオ人口	29,000	28,928	28,796	28,664	28,532	28,400	28,268	28,136	28,004	27,872
シナリオ3	Uターン数	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120
	シナリオ人口	29,000	28,988	28,856	28,724	28,592	28,460	28,328	28,196	28,064	27,932

4.2 将来的にも住み続けたくない理由

では、将来的にも住み続けたくない理由はなんなのだろうか？

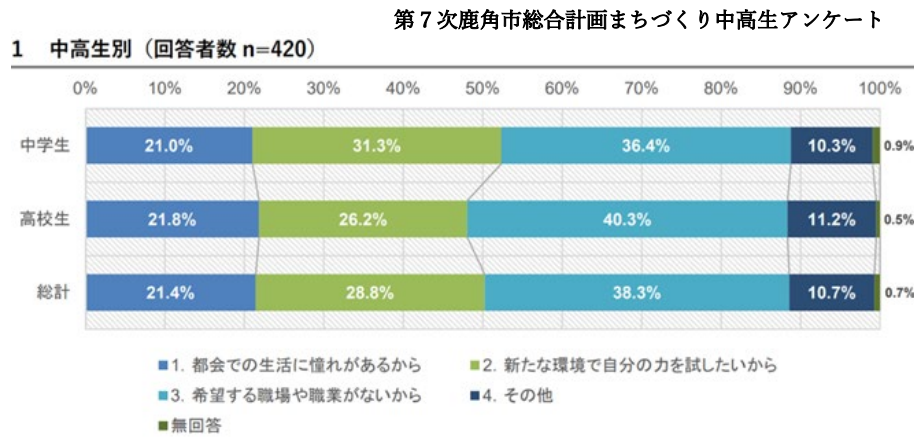
理由で一番多いのは中高生ともに「希望する職場や職業がないから」で、二番目が「新たな環境で自分の力を試したいから」、そして「都会での生活に憧れがあるから」が続いている。

「都会への憧れ」、「自分の力を試したい」という若者の意識は、鹿角市だけでなく他の地域の調査でも見られる。自分の生まれ育った地域を離れるということは、若者にとってはチャレンジ精神の表れでもあり、大人たちはその思いを潰すのではなく応援する必要がある。重要なのは、鹿角市を離れても、将来、ふるさと鹿角に回帰する道筋を開いておくことである。

ここで着目すべきは中高生の多くが「希望する職場や職業がないから」と考えていることである。鹿角市には、2で見たように魅力的な産業があるにもかかわらず

らず、このような意識があるとする次の2点が考えられる。

- ① 鹿角市に本当に希望する職場や職業がない。
- ② 鹿角市には希望をもてる職場や職業があるにも関わらず、そのことを知らない。



現在、鹿角市の小中学校では、「生きる力 学びの、その先へ」の観点からキャリア教育が行われている。キャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」である。このような能力や態度は、具体的な地域産業に関する教育、とりわけ様々な職業体験を通して育成していくこととなるが、残念ながら、多くの中高生が鹿角市には「希望する職場や職業がないから」と感じているのである。「地域産業の中に希望する職場や職業がある」と児童、生徒が自認できるよう、キャリア教育の一層の充実が求められる。

特に、小中学校と高校では設置主体が異なることから、学校教育の円滑な接続も重要である。小中学校で実施している鹿角市の地域産業にかかるキャリア教育を高校に円滑に接続する努力が求められる。

5 共同研究の概要

以上のように鹿角市は歴史・文化が脈々と受け継がれ、自然に恵まれ農林業が発達し、付加価値の高い製造業も立地しているが、中心市街地の衰退と中高生の定住意向が低いという課題を抱えている。そこで、鹿角市の中高生と武蔵野大学の学生により、鹿角市の未来、中心市街地の未来を考えるフューチャーセッションを行った。

この共同研究は、2020年に鹿角市と武蔵野大学が包括連携協定を締結したことから構想し、鹿角市政策企画課と協議調整し、2021年度から共同研究に着手したものである。

5.1 2021 年度概要

コロナ禍であったことからオンラインで鹿角市の中高生 5 名と武蔵野大学の学生 11 名による鹿角の未来を考えるワークショップを実施した。

2021 年 8 月 3 日（火）、鹿角市の中高生はコモッセの会議室に集まり、大学生は武蔵野キャンパスの教室に集まり、両会場を zoom でつないだ。フューチャーセッションには様々な手法があるが、オンラインという条件で遠隔式マグネットテーブル、参加者固定・テーマ変動型ワールドカフェ、クイックプロトタイプングにより実施した。

まず、鹿角市政策企画課職員が鹿角市の現状・課題等についてストーリーテリングを行い、続いて中高生によるフォトレポート「鹿角市の魅力・自分の思っていること」をシェアした。その後、「30 年後の鹿角市の市街地」をテーマにフューチャーセッションを行った。30 年後、賑わっている市街地という将来像を描き、現在、取り組まなければならない課題として「観光」「教育」「空き家活用」に整理された。重要なのは、鹿角市の中高生から発せられた「大学がない、働きたい仕事がない、遊ぶ場所がないから鹿角を離れざるを得ない」という率直な意見である。

5.2 2022 年度概要

しかし、鹿角市はコンパクトシティづくりに取り組んでいる。住民が必要とする様々な機能を中心市街地に集約し、都市の利便性を高めようというものである。これは中高生にとって明るい未来につながるのではないかと観点から鹿角市において中高生 5 名と武蔵野大学の学生 7 名によるフューチャーセッションを 8 月 8 日（月）～12 日（金）の 5 日間、行った。

まず、現在、鹿角市の中心市街地で行われているまちづくりについて鹿角市政策企画課の担当者がストーリーテリングし、コンパクトシティづくりの現状をシェアした。そして、中高生と学生が 3 人一チームとなり、中心市街地の様々な

ステークホルダーへのハイポイントインタビューを実施した。

次に、大学生と中高生が3つのグループに分かれインタビューで抽出された様々なキーワードについて、対話を深め、鹿角市の将来像を描き、さらにバックキャストして課題と解決策をまとめた。



ストーリーテリング



問いつくり



インタビュー



フューチャーセッション



バックキャストिंग



クイックプロトタイピング

以下が提案内容である。

A 班「おかえりが響くまち」

A 班は、インタビューから、中心市街地が昔は賑わっていたことを実感するとともに、高校を卒業して進学や就職で東京を始めとした首都圏、県内の他都市、

仙台、岩手、青森などに行くことは鹿角市の発展のために必要と考える人が多いことも知った。また、東京で服飾関係の仕事をしていたが、家業を継ぐために戻った飲食店の女性店主と出会い、移住支援を受けることなく故郷に戻っている事例を知った。確かにデータを見ると、社会増減の転出数と転入数の差は縮小しつつあり、特徴的なのは東京からの転入数は東京への転出数よりも多くなっている。つまり、鹿角市にはUターンを受け入れる土壌はあるということである。

そこで、「おかえりが響くまち」をテーマに、若者が外で様々なことを吸収し、街に帰ってくることを願い、そのときに鹿角市がどのような姿であつたら良いかを考え、改善点や提案として下記の「自然」、「歴史・文化」、「仕事」の3つの分野についてまとめている。

「自然」は鹿角市の最大の魅力である。鹿角市の特色は、冒頭にも述べたように八幡平、十和田湖、湯瀬溪谷など豊かな自然である。自然は農産物や畜産物の生産に不可欠であるとともに、人間の心と体の健康を維持するために重要なものである。鹿角の自然の中で育ち、都会に就職や進学した人々がその自然を懐かしみ、戻ろうとしたときに変わらない自然があつて欲しいという願いがある。

「歴史・文化」も鹿角市が日本だけでなく世界に誇れる財産である。関善酒店、鹿角市歴史民俗資料館など有形文化財や花輪ばやし、花輪ねぷた、大日堂舞楽など無形民俗文化財、大湯環状列石など遺跡だけでなく、多くの昔話が語り継がれている。古くから鉱山町として発展し、多くの人が居住したことが所以である。こうした歴史・文化を将来にも残っていることも、ふるさとに戻る誘因となる。

「仕事」は、人間がいる限り、必ず必要なものである。特に、転出した人たちが鹿角に戻ってきた時に仕事がなければ、働く場がなく生活が成り立たない。したがって、現在から産業政策に力を入れるべきである。既存の農林業、観光に関連したビジネス、生産性の高い工場や小売店だけでなく、空き家、空き店舗をオフィスにした起業支援、創業支援セミナーの開催などにより選択肢を広げる。

B班「んだ、鹿角さ、け！一人・町・仕事の一体化を実現ー」

B班は、インタビューを通して、20年後、「んだ、鹿角さ、け！一人・町・仕事の一体化を実現ー」しているという将来像を描いた。

まず、鹿角市には様々な魅力があるのにそれが知られていないという意見か

ら、情報発信力に着目している。また、「ひと」の課題として「若者が面白いと思う仕事が少ない」とうことを改めて実感している。そして、「まち」では、交通の利便性が良くならない背景として「公共交通に関心のある市民が少ない」という気づきを得ている。確かに、鹿角市の調査によると中心市街地への交通手段は8割以上が自家用車で、公共交通を使って徒歩で来る人は少ない。公共交通が不便だから自家用車利用が多いのか、自家用車利用が多いので公共交通が発達しないのかは、簡単に結論は出せない。しかし、中心市街地に住んでいる人も車で中心市街地を移動していることから、中心市街地の人たちが歩きたくなるようなハード、ソフト、両面からの工夫も課題としている。

いずれにしても、B班は、ひと、まち、仕事の問題は、それぞれ単独で生じているのではなく、相互に関連していること、その解決には定住・移住促進とまちづくり、産業振興を連携させる必要があることを提案している。そして、その前提として、鹿角市の魅力を内外に発信する必要があり、その手段としてSNSを活用すべきであるという提案も行っている。

C班「未来へ繋ぐ地元愛—文化・暮らし・観光—誇れるふるさと鹿角」

C班はフューチャーセッションから「未来へ繋ぐ地元愛～文化・暮らし・観光～誇れるふるさと鹿角」という将来像を描き、その課題として①鹿角の魅力を地域内外へ発信すること、②誰もが気軽に訪れられる鹿角であること、③居場所づくり・サードプレイスをつくることを挙げ、それらを実現するアイデアを提案している。鹿角市から転出した人が戻ってくるということを主旋律としながらも、新しく鹿角市に転入した人も含めて「誰もが気軽に訪れられる鹿角」であること、そして様々な人のための「居場所づくり」を提案している。ともすると地方は狭く濃密なコミュニティになりがちであるが、都会のような無縁社会では困るが、個人同士の適度な距離感も必要ではないかというメッセージも込められた提案である。

6 まとめと今後の研究

今回のフューチャーセッションは、中心市街地の衰退と中高生の定住意向が低いという二つの問題を解決する一つの試みとして実施した。

1年目は、プログラムに参加した鹿角市の中高生から定住意向と「大学」、「仕事」、「余暇」との関係について意見が出された。若者の定住意向を高める対策としての示唆は得られたが、一方で中心市街地の活性化については正対できなかった。オンラインだったことから、ファシリテーションが十分でなかったこと、参加者のダイアログの深まりという部分では限界があった。

また、2年目は、鹿角市の中心市街地の現状等についてストーリーテリングを行い、中心市街地の未来を考えるフューチャーセッションを行い、鹿角市から転出した人たちが戻ってくる将来像を描いた。そして「自然」、「歴史」、「文化」、「観光」、「仕事」、「情報発信」、「交通利便性」、「居場所」などに係る課題と解決策が提案されたが、中心市街地というよりは鹿角市全体の課題となった。

総括すると、鹿角市の中高生が定住意向を高めるには、「大学」、「仕事」、「遊び場・居場所」がポイントとなる。また、そのために様々な課題がシェアされたが、それらは中心市街地という部分の課題でなく鹿角市全体の課題として取り組む必要がある。つまり、若者が鹿角市に留まる、又は鹿角市から転出した人たちが戻ってくるためには、大学があること、仕事があること、居場所や遊び場があることが必要となる。鹿角市では、これらを具体的な施策にどう落とし込むか検討を始めている。

このようにUターンでは一定の成果が見られるが、中心市街地問題の解決については、依然として不十分である。2023年度は「鹿角市の中心市街地問題」という抽象的な問題提起でなく「鹿角市の中心市街地の魅力」として具体的な問題についてフューチャーセッションを実施した。取り組みが鹿角市及び武蔵野大学でも浸透してきたこともあり、鹿角市の中高生10名、武蔵野大学の学生14名と、それぞれ2022年度の倍の参加を得て実施することができた。特に、高校生の参加が大幅に増加したのは県立花輪高校の理解と協力によるところが大きい。2023年度の実施結果については、今後、実施する中高生、学生に対する定住意向の調査を行った上で、別途紀要で報告したい。

謝辞

本研究にあたり、ご協力をいただいた皆様です。（敬称省略）

鹿角市長 関厚

鹿角市総務部政策企画課課長 金澤寛樹

鹿角市総務部政策企画課総合戦略室室長 成田仁文

鹿角市総務部政策企画課総合戦略室主査 海沼寿和

鹿角市総務部政策企画課総合戦略室主査 五日市栄光

鹿角商工会事務局長 高木和昭

(株)ファストコム鹿角オフィスマネージャー 柳澤崇志

感動鹿角パークホテル総支配人 黒沢忠直

NPO 関善賑わい屋敷理事長 大森好一

花輪ふくし会「かみはなわ」管理者 奈良佳仁

Salon de 割烹 美ふじ

KAT'S BURGER オーナーシェフ 高橋勝美

千歳盛酒造（株）製造部門 児玉和幸

(株)タカヤ代表取締役社長 高谷秀和

文化の杜交流館コモッセ館長 成田小百合

鹿角市歴史民俗資料館館長 藤井安正

café SAKUYA 代表 柴田佳一

鹿角市福祉プラザ事務局長 児玉晃

ダイマル呉服店 渡部嘉代子、渡部律子

鹿角花輪駅前観光案内所・DMO 推進室 菅原由紀子

(有)石木田文具店 石木田幸一郎

鹿角コミュニティ FM(株)代表取締役 安保朗

ハミングカード協同組合理事長 星川由則

セキワ土地建物代表 石坂和彦

(株)関小市商店店主 佐藤景子

(株)MKpaso 代表取締役 三ヶ田一彌

ありがとうございました。

参考文献

- 石川秀輝、古川柳蔵（2018）「バックキャスト思考」『ワニ・プラス』P53-56,P75-87
- 香取一昭、大川恒（2011）「ホールシステム・アプローチ」『日本経済出版』P15-35,P38-42,P47-49,P54,P60-68
- 野村恭彦（2015）「イノベーション・ファシリテーター」『プレジデント社』P26-30
- ウッディ・ウェイド 野村恭彦監訳、関美和訳（2013）「シナリオ・プランニング—未来を描き、創造する」『英治出版』P20
- アダム・カヘン 小田理一郎監訳、東出顕子訳（2015）「社会変革のシナリオ・プランニング」『英治出版』電子書籍
- 日本総合研究所未来デザインラボ（2016）「新たな事業機会を見つける未来洞察の教科書」『KADOKAWA』電子書籍
- 木村直義（2014）「ずるい考え方 ゼロから始めるラテラルシンキング入門」『あさ出版』電子書籍
- 安斎勇樹、塩瀬隆之（2020）「問いのデザイン 創造的対話のファシリテーション」『学芸出版社』P48-53,P110-183
- 高橋誠（1984）「問題解決手法の知識」『日本経済新聞社』
- 広井良典、小林正弥（2010）「コミュニティ 公共性・コモンズ・コミュニティアニズム」『勁草書房』P11-32,P113-133,P182-189
- エミール・デュルケーム 田原音和訳「社会分業論」『ちくま学芸文庫』P7-20
- 墨田区（2006）「墨田区基本構想～水と歴史のハーモニー～人が輝くいきいきすみだ」
- 墨田区（2022）「墨田区基本計画 2022 年度 - 2025 年度」